



博愛記念病院
月刊広報誌



身体拘束は ゼロにできる

医療現場では、徘徊や転落、チューブ類の抜去などの危険を防止するために身体拘束が行われてしまうこともあります。当院では、目的ある離床や患者さんの尊厳を大切にしたケアなどに取り組むことで身体拘束ゼロを実現しています。

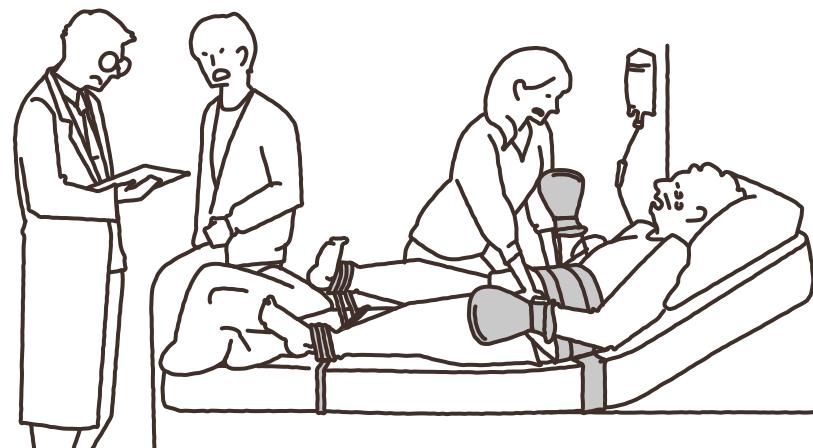
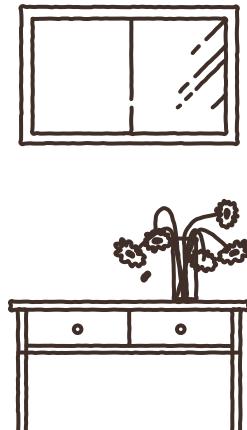




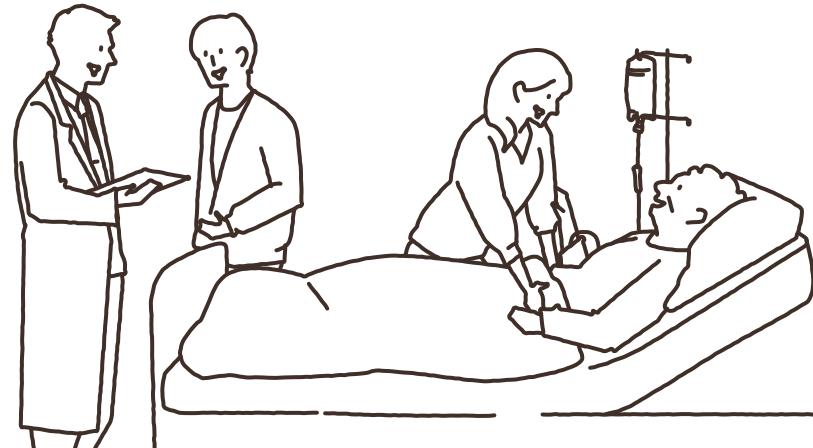
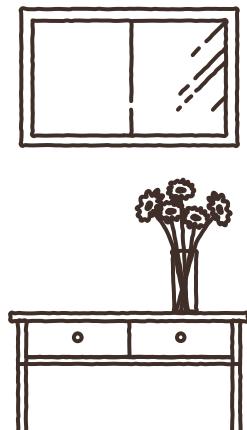
身体拘束を廃止します



BAD



GOOD



身

体拘束により自由に動けなくなった患者さんは、関節拘縮や褥瘡、筋力や心肺機能の低下といった身体的な悪影響だけでなく、精神にも極度のストレスを被ります。怒りや不安、スタッフへの不信感といった段階を経て、最終的にはすべてをあきらめ、生きる意欲を失ってしまいます。しかし、いまだに多くの医療現場では、点滴や栄養のチューブ、気管切開チューブなどを抜くと危険だからという理由で、身体拘束が必要と判断される場面が残っています。

認知症のある患者さんへの無意識の偏見や差別心もまた、身体拘束の安

易な実施につながっています。認知症のある患者さんを「自分たちと同じ一人の人間」ではなく「自分たちとは違う認知症の患者」と捉えてしまうことで、自分の家族にはできないようなこともしてしまうのです。まずは、誰しもが持ち得る、この無意識の偏見や差別心を自覚しなければいけません。

私たちは身体拘束ゼロの実現を目指し、「身体拘束を選択肢に入れず、最大限考えて工夫すること」を大切にします。そのための教育に努め、センサーなどのツールを潤沢に用意し、見守りやコール対応に必要なマンパワーも確保。身体拘束ゼロに向けた取り組みを強力にサポートしていきます。

身体拘束に頼らないケア



scene1

目的ある離床で生活リズムを整える

人は本来、拘束される存在ではありません。目的ある離床を軸に生活リズムを整え、拘束の原因になりやすい医療用チューブ類を外せるように、患者さんの力を引き出す支援を丁寧に重ねて、身体拘束ゼロを実現しています。



scene2

人としての尊厳を大切にする

「人として大切にされている」と実感いただけるよう、視線や声かけなどの触れ合い方に気を配り、安心して過ごせるよう心がけています。その安心感が、拘束要因とされる不安、拒否が起きにくくなる「よい循環」を生んでいます。

看護

栄養

はくあいで働くひと



Z世代とのコミュニケーションを
学ぶメンターフォローアップ研修。

HAKUAI PHOTO SNAP

ひき肉と野菜を煮込んだフィリピン
料理「ピカディージョ」が給食に！

リハビリ

デイケア



接遇の基本と実践ポイントを学ぶセミナーを開催。

買い物リハを通じて、持久力と注意力向上を図りました。

回復期リハビリテーション病棟 副師長
身体拘束ゼロ化委員 看護師

竹内 聖子
Takeuchi Shoko

患者さんの変化を
より身近で感じています！



あなたの仕事内容を教えてください

身体拘束に頼らない安全環境を多職種で構築し、患者さんとの自分らしさを守る個別ケアの実践を担当しています。

この仕事のやりがいは何ですか

拘束しないことで行動の自由や意欲が戻り、経口摂取など“できること”が増える瞬間に立ち会えることです。

今後の目標を教えてください

多職種で協働しながら身体拘束ゼロを継続し、患者さんを中心の視点で個別性と質の高いケアにつなげていきます。

